

症状と病気 子どもの気がかり事典

こんなときどうするの？

総監修 奥野晃正・藤枝憲二／責任編集 伊藤善也
(株)永岡書店、2001年、256ページ、定価1500円

伊 藤 善 也

新世紀を迎えてからも子どもにまつわる悲しい事件は絶えることがない。両親がパチンコに興じている間に炎天下の駐車場に放置された自家用車内で脱水のために亡くなる子ども。教育やしつけという名のもとで行われる折檻。親子関係は一体どこで狂ったのだろうか。

また日本国民は物質的に豊かになったことに異論はない。時間に関係なく何でも手にすることができるコンビニエンスストア。手軽な移動手段としてほとんどの家庭に普及した自家用自動車。これらの結果として大人でも子どもでも今や肥満が社会問題化している。豊かさの履き違いである。

一方で小児科外来で母親や父親をみるとなぜか自信がない。深夜になって熱が出はじめたと言って受診する母親。子どもは元気一杯に診察室で遊んでいる。

このような社会の姿を外来から眺めていると巷に数多く発せられた情報が正しく解釈されていないことを痛感する。地図と羅針盤はあるが、使い方がわからずに大海原を風に身を任せて流されている状態である。

漂流しているような状況を憂慮する人は決して少なくない。その証拠に世間には育児や小児科医療に関する解説書が数多く出版されている。しかしながら上滑り的な内容のものが多く、専門化した医療を理解させ、複雑化した社会を乗りきる知恵を与えるというには物足りない。答えは書いてあるが答えに至る道筋が記されていないので応用が利かないのである。

そこで旭川医科大学小児科学教室同門会では専門的な内容を平易なことばで解説することを目標にした出版物として本書を企画した。地図と羅針盤をどのように使うかを理解してもらうための出版である。

本書は5つのパートに分かれている。気になる子どもの症状と一般的な病気、発育・発達に関わること、重い病気、子どもの生活と学校・思春期の問題である。

かぜや肺炎といった病気の解説や吐くことや下痢といった症状の説明にしてもそのメカニズムに踏み込んで

話を進めている。また病気にとどまらず成長と発達について、その科学的な背景を語ることも内容に加えた。さらには食べることや寝ることに本書では触れている。このような説明を読むと堅苦しい医学書を想像してしまうが、実は読み物としてもまた楽しめる。各単元の合間にはカナダの小児科事情、薬の飲み方、NICU(新生児集中治療施設)の役割や重症心身障害児に対する医療などの解説を加えて、内容に幅を持たせるように配慮した。

このような本書を一冊持てば子どもにかかわるさまざまな問題点とその基本から理解できるようになっている。

出版に限らず社会の流れ全体に東京偏重傾向があり、地方発信の情報が少ないのが現状である。地域に根付いた、地域を意識した情報が乏しく、どんなことでも東京や大阪からになってしまう。このような観点からも本書は特筆に値する。すなわち執筆陣はすべて本学関係者で占められているのである。小児科はもとより眼科、耳鼻咽喉科、泌尿器科、歯科口腔外科や薬剤部の先生方にご協力を仰いだ。

このような実用書の類はミリオンセラーを期待できるものではないが、初版13,000冊を発売開始2週間で売り尽くし、すぐに第2刷5000部の印刷を開始した。売れ行きが好調なのは書店での扱いに現れる。すなわち売れ筋の本は本棚に縦に置かれずに表紙が見えるように平らに積まれる。これを“平積み”という。東京神田にある三省堂書店ではこの“平積み”で売られるほど好調な売れ行きである。このように子どもについての理解を深めていただくだけではなく、旭川医大の知名度を上げることに一役買っている。

本書は一時の流行に乗って企画・出版したものではない。時代の変化に応じて今後も改訂を続けられる息の長い出版物になることを小児科学教室同門会では祈っている。

(旭川医科大学・小児科学講座)